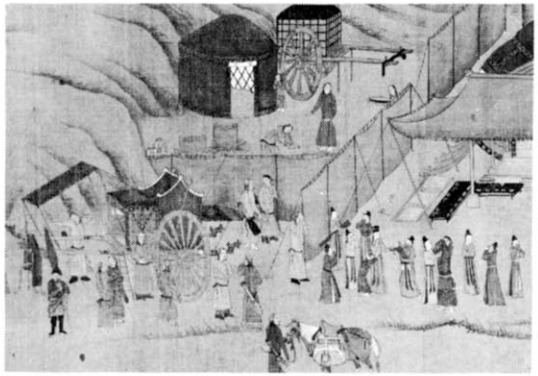
文姫帰漢図巻について



文姫帰漢図巻 第十三拍(部分)明時代

今夏の「中国の明・清時代の美術」展に、「文姫帰漢図巻」(ぶんききかんずかん)という絵巻物が展示されます。これは蔡文姫(さいぶんき)という薄命の才女の物語絵で、胡笳十八拍図巻(こかじゅうはっぱくずかん)とも呼ばれます。胡笳とは、胡人(中国の西と北に住む異民族の総称)が葦の葉をまいて吹く笛のことで、その声調を琴の曲にうつしたのが胡笳曲です。胡笳曲は十八の部分に区切れていて、それに合うように歌詞が十八章ありますので、曲と歌詞の両方を合わせて、胡笳十八拍と言います。

蔡文姫は後漢末の二世紀から三世紀にかけての人で、蔡邕(さいよう)という有名な学者の娘です。父が動乱にまきこまれて殺されたころ、彼女は北方から侵入した南匈奴(みなみきようど)の左賢王の兵に捕えられ、遠い砂漠地帯に連れ去られました。その地で文姫は無理やり左賢王の妻にされ、長い間異境の胡人の間で生活し、王との間に二人の子供もできました。ところが、当時の中国で政権を握っていた魏の高祖曹操(そうそう)は、文姫の悲運を知り、身代金を出し使者を送って、文姫を迎えとったので、彼女はようやくなつかしい中国に帰ることができました。

文姫は父仕込みの学問があり、詩や琴にも秀でていました。胡笳十八拍は、文姫がその詩才と楽才とをもって、自分自身の数奇な運命を楽曲と歌詩に表わしたものと伝えられていますが、確かなことはわかりません。胡笳十八拍に基づき、文姫の悲しい境涯を描いた絵巻は宋時代ごろから作られたようで、いまアメリカのボストン美術館に宋本と言われる五段だけの残欠があるほか、宋代から明代に至る十八拍揃いの完本が数点遺っています。大和文華館所蔵のものは明代の写しですが、宋画の趣きを忠実に伝えている上に、十八の場面と詞書が完全に揃っています。

今回はこの「文姫帰漢図巻」の全段を詳しい解説つきで展示しますので、中国の絵物語の面白さを十分に味わっていただくことができます。日本における従来の中国絵画鑑賞は、ややもすると山水、人物、花鳥などを偏重し、風俗画を軽視する傾向にありました。そのような偏見を正すためにも、また日本の絵巻について考えるためにも、「文姫帰漢図巻」のような中国の風俗絵巻に注目する必要があります。

〈島田修二郎「文姫帰漢図巻について」大和文華37号による〉

季刊 美のたより No.36
昭和51年 6月30日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.